NO.85

蓬左

HÔSA

亀鈕銅印
「明倫堂図書」

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

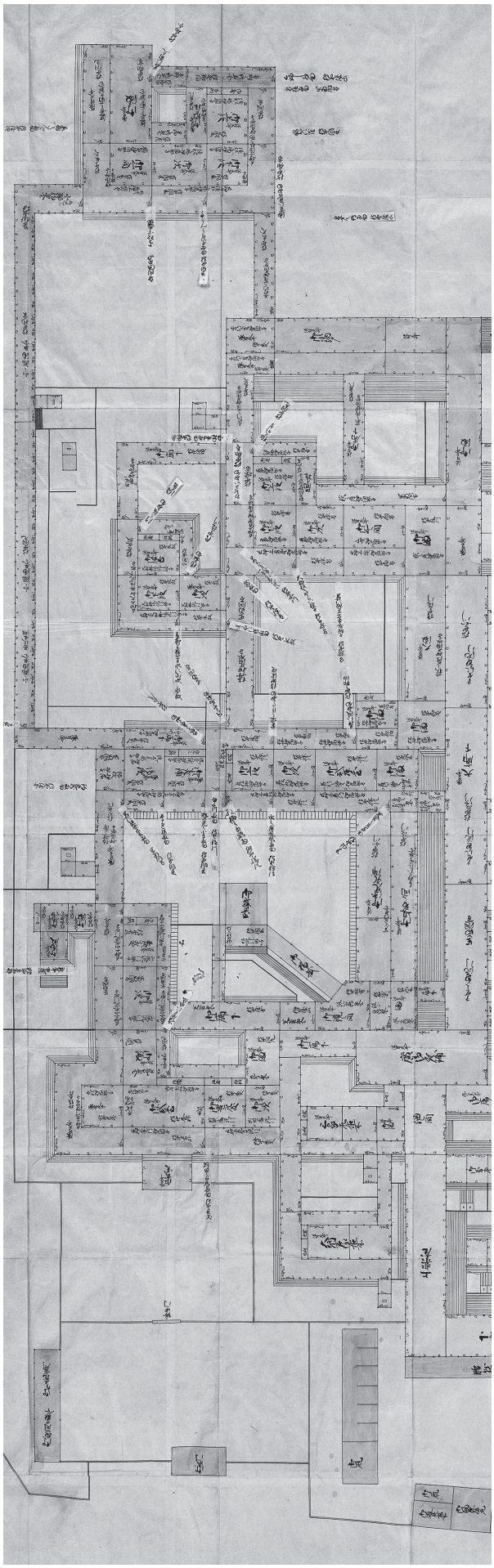
徳川美術館新館開館25周年　徳川園80周年記念　秋季特別展

徳川将軍の御成

御成（おなり）とは、権力者が臣下の屋敷を訪問して、主従関係を再確認する儀式です。鎌倉幕府以来、武家の重要行事として、徳川政権もまた有力大名に対する御成を行いました。徳川将軍家による御成は、二代将軍秀忠が行った元和九年（一六二三）の尾張徳川家江戸屋敷への御成が、一つの規範となりました。尾張徳川家では御成専用の御殿を建造し、伝来の名品を飾り付けて、将軍をはじめ随行した数千人規模の人々に対して饗応を行いました。

こういった絢爛豪華な儀式は、三代将軍家光以降、順次簡略化されていき、五代将軍綱吉による御成で事実上終焉しました。その後、十一代将軍家斉により復古的に実施されますが、略式で行ったことから、「御成」ではなく「御通抜（おとおりぬけ）」と称しました。

この展覧会を通じ、徳川将軍家による御成の実態と変遷を明らかにする中で、蓬左文庫展示室では、徳川将軍家以前の御成と、尾張徳川家における御成の空間を紹介します。室町将軍家によって形作られた御成の儀式や、室内の飾り付けを踏まえ、豊臣政権での変質を経て、徳川政権に引き継がれた歴史的背景や、尾張徳川家江戸屋敷の御成空間を、伝来の道具や図面などの史料を基に明らかにします。



御成御殿絵図（部分）　江戸時代　十七世紀　名古屋市蓬左文庫蔵

五代将軍綱吉の御成を迎えるにあたり、元禄十一年（一六九八）に麹町邸に建造された御殿。綱吉は、この御殿へ御成した際、尾張徳川家一門に対し、『四書』の講義を行った。

展示室1

尾張藩の学問と教育

吉見家・河村家に代表される古代学研究や伊藤圭介を生んだ尾張本草学など、江戸時代の尾張には、先進的かつ個性的で多彩な学問が生まれました。こうした尾張における学術文化発展の基礎は、尾張徳川家初代義直（一六〇〇―五〇）によって形成されました。我が国初の聖堂の建設や、大名家随一と言われた蔵書の収集と尾張藩御文庫の創設、優れた学者の招聘と保護、彼らによる書物の編纂の主導など、幕府、大名家に先駆けた学術振興策は、義直につづく好学な歴代藩主等の政策に受け継がれて、尾張における多彩な学問の発達を促すことになりました。

なかでも、八代宗勝、九代宗睦の藩政改革によって、藩士教育と民衆教化を目的として誕生した藩校明倫堂は、総合的な教育と学術研究の機関となり、尾張における学術・文化の発展に大きな役割をはたしました。

蓬左文庫は、昨年度、明倫堂の書籍に使用された蔵書印を御寄贈いただきました。これを記念し、歴代藩主や藩の学者の著作や遺墨、明倫堂にかかる記録や蔵書などにより、尾張藩の学問と教育を紹介します。

「文会書庫（ぶんかいしょこ）」扁額　伏原宣條（ふしはらのりえだ）筆　江戸時代　18世紀　名古屋市鶴舞中央図書館蔵

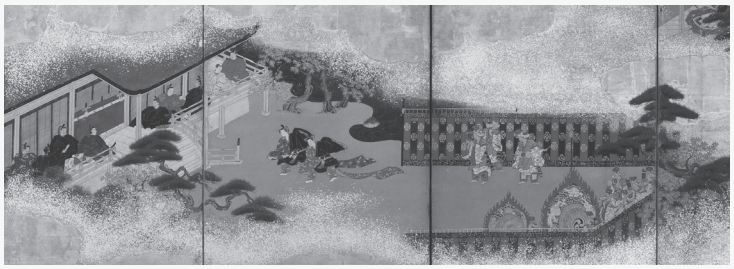
河村秀穎（ひでかい）が安永2年（1773）に建設した河村家の文庫「文会書庫」に掲げられた扁額。
確かな資料によって客観的に古代をとらえた秀穎・秀根・益根ら河村家の学問を支えた文庫の蔵書数は約二万余冊。蔵書は秘蔵することなく有志には惜しみなく貸し出された。河村家の蔵書は、大正12年（1933）市立名古屋図書館（現名古屋市鶴舞中央図書館）の開館に際して同館の蔵書となり、一部は戦災で焼失したが、現在も同館に所蔵されている。

源氏物語の世界

源氏物語にまつわる絵画・書籍・工芸品など、成立以来様々な形で享受されてきた『源氏物語』の世界を紹介します。

平成24年11月17日（土）～12月13日（木）
展示室2

平成25年2月14日（木）～4月7日（日）
展示室1でコーナー展示



源氏物語図屏風（部分）　江戸時代　18世紀　徳川美術館蔵

右隻に「玉鬘」「澪標」「空蝉」、左隻には「桐壺」「初音」「紅葉賀」と計六図が、金雲・金霞で区切られゆったりと配されている。描かれた場面は「紅葉賀」である。

展示室1

大名と鷹狩

鷹やハヤブサなど猛禽類を調教して、鳥や兎などの狩猟をするのが鷹狩です。西欧や中東、アジア諸国などでも古来よりおこなわれ、現在でも続いています。日本でも古くから天皇や貴族ら上層階級の趣味として発達しました。

多くの戦国武将らが愛好し、徳川家康は特に好んだといいます。江戸時代には将軍・大名の庇護のもとで、高度に技術や道具が洗練され、鷹匠、鷹場などの制度も整備され、獲物や鷹の贈答も将軍ならびに大名・家臣間相互の武家儀礼として重視されました。

本展では尾張徳川家に伝えられた鷹狩の諸道具をはじめ、鷹や鷹狩にまつわる絵画や記録類を紹介します。

展示室2

名古屋城下図

慶長十五年（一六一〇）、徳川家康は名古屋城と城下町の建築を始め、清須の町人を名古屋に移しました。その後作成された名古屋城下図によって、名古屋の発達の経緯をたどります。

雪中鷹捉搦鶴図（せっちゅうたかつるをそくじゃくのず）　狩野惟信筆　一幅
江戸時代　18－19世紀
徳川美術館蔵

猛禽の鷹が大型の獲物である鶴を捕獲し、襲いかかった瞬間の緊張を伝えている。周囲の背景は省略されてはいるものの飛び散る雪の白い飛沫が、雪上での格闘をあらわしている。画家の狩野惟信（これのぶ）（1753～1808）は、将軍家御用絵師、木挽町狩野家の七代。少年期から画家として活躍し、号を養川院（ようせんいん）と称し、当時の画壇の主導者であった。

鷹狩絵巻　二巻のうち　江戸時代　17－18世紀　徳川美術館保管

原題は「大名遊山絵巻」とする。二巻の全てを通じて、山野や農耕地など様々な場所で、高位の大名が鷹狩を楽しむ様子が描かれている。従者や獲物、鷹狩の状況などが精細にあらわされている。モデルになった大名や画家は未詳ながら、優れた筆致と彩色で描かれており、武家風俗の記録画としても貴重である。

会期：平成25年2月14日（木）～ 4月7日（日）

展示室1

ひなの世界

徳川美術館で開催される「尾張徳川家の雛まつり」展にあわせて、蓬左文庫でもお雛様の展示をします。

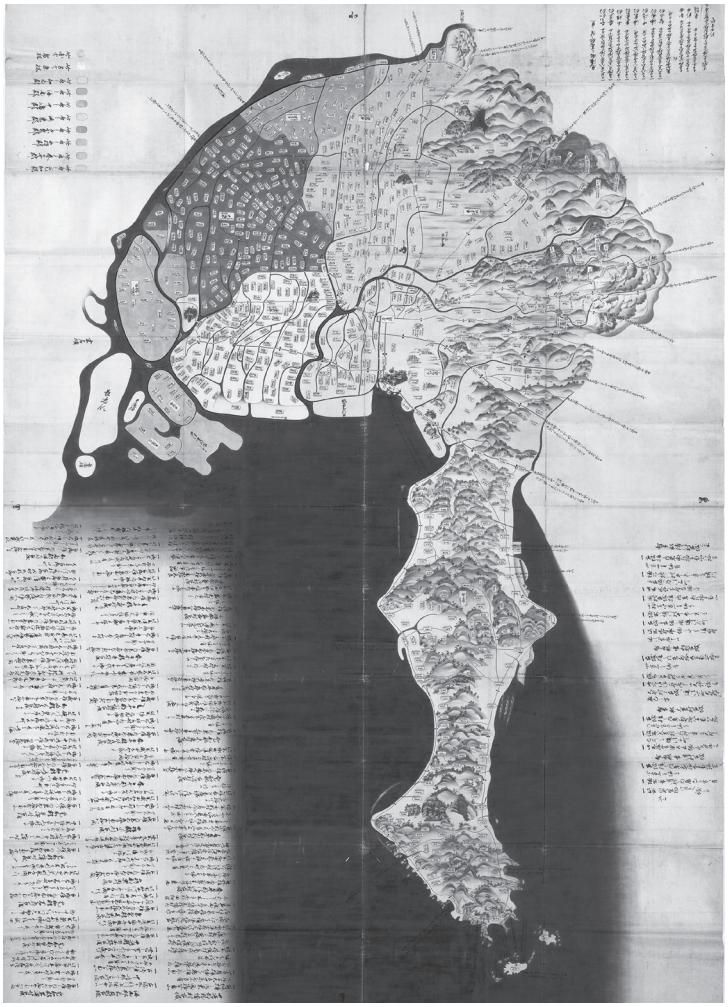
展示室2

国絵図

日本は古代から尾張国、美濃国など六十余の国に分かれていました。古代では国は行政の単位で、朝廷が国ごとに国司を任命しました。中世には鎌倉・室町幕府が国ごとに守護をおきました。戦国時代になると、一人の戦国大名が実力で支配している範囲が「国」であり、これは従来の国の範囲とは別のものでした。江戸時代に入ってからでも各大名の領地は、必ずしも国単位でありませんでした。

江戸幕府は各地の大名や代官に命じて、領国図ではなく国絵図（一国単位の地図）の作成を何度か命じました。おもな国絵図作成命令は、慶長九年（一六〇四）、正保元年（一六四四）、元禄九年（一六九六）、天保二年（一八三一）の四回です。これは幕府が全国支配を徹底するための大事業で、作成された絵図は幕府に提出されました。これらの絵図を江戸幕府撰国絵図といいます。絵図には、城、すべての村の名前と石高、街道、一里塚、湊、古城跡、大きな寺社、霊山、川などが描かれました。尾張については、慶長の国絵図は残っていませんが、正保と元禄の国絵図は写図や控図が、天保の国絵図は現物が残っています。また国絵図とともに、一国ごとに全部の村々の名前と石高を記した郷帳も、幕府に提出されました。

作成を担当した大名家には、下書図や提出した絵図と同一の控図などが残りました。国絵図はきわめて大きく（一辺三メートルから一〇メートルくらい）扱いづらいので、適宜記載事項を省略しサイズを小さくした国絵図が多数作成されました。さらに多くの大名は、幕府や他の大名などにつてを求めて、各国の絵図も入手しました。尾張徳川家の蔵書を所蔵する蓬左文庫にも、日本中の国絵図が残っています。今回はその中から幾つかを紹介します。



尾張国図　江戸時代　17世紀中ごろ　徳川美術館蔵

お詫びと訂正

前回の『蓬左』No.84の“閲覧室だより「レファレンスの窓」”「四つの長栄寺」の上段で「一、宮出町長栄寺……廃寺」と書きましたが、「廃寺」を「尾張旭市に移転」に、お詫びして訂正します。

徳川園80周年特別企画

尾張徳川家大曽根邸と徳川園

徳川美術館学芸課長　原史彦

※平成二十四年六月二十二日（金）徳川園ガーデンホールで行った記念講演会の概要を紹介します。

はじめに

ただいま、ご紹介にあずかりました原です。一時間半ほど大曽根邸の話をさせていただきます。大曽根邸というテーマで話をするのはもしかしたら初めてかも知れません。徳川園は、かつて尾張徳川家の屋敷があったということは知られていても、詳しいことはよくわかっていませんでした。そこで、まず今年は徳川園開園八十周年という節目にあたるため、徳川園の歴史がわかるパネルを作成し、徳川美術館の南の廊下に掲示しました。

現在、名古屋市蓬左文庫で「尾張徳川家大曽根邸と徳川園」展を開催しています。当初は、実際に展示する作品・史料があるのか、手探りの状態で調査を始めましたが、蓬左文庫をはじめ色々残っていることが分かりました。特に美術館の地下倉庫には、ゆかりの品々が残っていたことは、今回の調査の大きな成果でした。

この大曽根邸を造った方は、尾張徳川家十八代の義礼（よしあきら）です。十四代の当主で、明治維新後に再び家督を継承して十七代となった慶勝（よしかつ）は、幕末維新期に事実上最後の殿様として活躍されたので、歴史学的には有名な方です。義礼の一代後の十九代義親（よしちか）もまた、徳川美術館を創設し、侯爵として近代史に足跡を残されたので有名な方です。義礼はこの二人の間に挟まれた当主で、これまであまり事績を顕彰することはありませんでした。そのため、今回は義礼という当主がどのような人なのか、そして義礼がつくった大曽根邸はどういう邸宅であったのか、これをクローズアップするのも、今回の企画の主旨としております。

江戸時代の大曽根邸

大曽根御屋敷

本題のテーマは、近代の大曽根邸の話ですが、大曽根邸が造られる以前に、この大曽根の地にあった大曽根御屋敷のことについても触れさせていただきます。大曽根の地に最初に御殿を構えたのは尾張徳川家二代光友（みつとも）です。この方は大曽根に非常に所縁のある方です。初代の徳川義直の唯一の男子で、生まれたのも大曽根、亡くなったのも大曽根です。正室以外の子どもということで生後暫くは、大曽根に匿（かくま）われていました。その屋敷は、今のマックスバリュ徳川明倫店の駐車場の北側あたりではないかと考えられます。そこには、光友が生まれた屋敷として、江戸時代を通じて保存された建物がありました。この屋敷は、大曽根邸ができた後も「東御屋敷（ひがしおやしき）」と呼ばれて大切に残されていました。

光友は、元禄八年（一六九五）頃より隠居所として大曽根屋敷建造に取りかかり、記録によると同年三月十八日に完成した屋敷に移っています。現在、徳川園では、この日を記念して無料公開の日としています。光友は元禄十三年（一七〇〇）に亡くなるため、五年間ほどこの屋敷に住んでいました。

蓬左文庫の松村冬樹・種田祐司学芸員に提供していただいた史料によれば、例えば朝日文左衛門の「鸚鵡籠中記（おうむろうちゅうき）」にこの屋敷の範囲が書いてあります。屋敷は、建中寺の北側に接しており、西端は今の山口町の交差点辺り、東西の幅は約一キロメートル、南北の幅は約七〇〇メートルと記されています。東西幅でいえば、今の山口町交差点から中央線を東に一〇〇メートルくらい先までが、かつての大曽根御屋敷ということになります。そして、矢田川が形成した河岸段丘上に御殿が造られました。美濃の山々を眺められる風光明媚な別荘地に造られた御殿で、崖下には十六挺だての舟を浮かべたという巨大な池もありました。面積は約十三万坪です。これは今の名古屋城の内郭部分の面積に相当します。まさに、城郭規模の御殿だったわけです。この御殿は光友が亡くなった後すぐ縮小・整理

されてしまいます。

重臣屋敷の時代

光友の歿後、大曽根御屋敷は尾張徳川家の重臣である犬山の成瀬家・三河寺部の渡辺家・岐阜羽島の石河家の三家に分割されます。光友が亡くなった場所を「御逝去の地」として約五万坪が残されたという記録があります。五万坪の土地の位置がよくわからなかったのですが、今回の調査で、その場所は成瀬家に分割された部分と判明しました。成瀬家の屋敷の面積は五万坪あります。おそらく成瀬家は、大曽根御屋敷跡地を自身の屋敷として拝領はするものの、光友由緒地として独自の造成は行わず、江戸時代を通じて、拝領当時の空間を残していたと考えられます。

大曽根御屋敷に関する遺構はないかと調べたところ、一宮の妙興寺の総門が大曽根御屋敷の遺構と分かりました。棟札が残っており、成瀬家からの寄進であること、今の片山八幡宮の少し南に成瀬家の中屋敷があり、その向かいの屋敷を殿様から頂戴したので、その屋敷の門を拝領して移築したことが書かれています。薬医門形式の豪壮な建築ですから、この門が大曽根御屋敷のいずれかの門であることの可能性は高いです。

中央線と旭丘高校に挟まれた部分が、渡辺家が拝領した土地です。渡辺家は代々家老を務める家柄で、中でも尾張徳川家十二代斉荘の下で家老を務めた渡辺規綱は文化人でした。号を又日庵といい、裏千家十一世玄々斎の実兄にあたります。二年で家老を辞め、隠居して風雅三昧の生活を送りましたが、隠居した先が大曽根屋敷で、ここで作陶活動も行っています。又日庵手造りの作品には、丸の中に大曽根の「大」を表した窯印を使用しています。

蓬左文庫が所蔵する図面の中に、大曽根御屋敷を描いた図面がいくつか残っていますが、その内の一つに石河家の屋敷図面ではないかと考えられる図面があります。ここに描かれた御殿は、おそらく光友が生まれた光友生誕屋敷と考えられるので、成瀬家と同様、石河家もまた、拝領した屋敷地を江戸時代を通じて保存していた可能性があります。

石河家の土地は、明治二年（一八六九）に尾張徳川家に返納されますが、尾張徳川家は光友生誕屋敷をそのまま残して東御屋敷として使用しました。今回の調査で、この東御屋敷が、大正五年（一九一六）に整理・移転される時の記録が出てきましたが、この図面と、江戸時代の図面とでは建物の形が異なるので、尾張徳川家が引き継いだ後、どうも光友生誕屋敷を改造している可能性があります。この大正五年の整理時に、元の建物の半分を取り壊し、一部を西側の庭園内に移築しました。その場所が、徳川園内南西部の段丘上にある芝生広場の場所です。その後、名古屋市に移管され、「清流軒」という名の茶室として一般に貸し出しも行われましたが、惜しくも空襲で焼失しました。

▲光友産湯井ロータリー

光友が亡くなった場所は、旭丘小学校の辺りと思われます。なお、徳川園黒門西側先にあるロータリーは、光友誕生時の胎盤を埋めた胞衣塚という伝承があります。戦前までは光友お手植えの椿があって天然記念物になっていましたが、これも空襲で焼けてしまいました。

近代の大曽根邸

徳川義礼

十八代の義礼は、かなり美男子だったようですが、わずか四十五才で亡くなります。十四代慶勝の子の義宜が、十六代当主でしたが十八才で亡くなってしまったので、慶勝は再度家督を継承して十七代となります。慶勝には当時、男子がいなかったので、高松松平家から義礼を養子として迎えますが、その後、慶勝に男子が誕生します。しかし、その男子を分家させ、義礼が十八代となりました。義礼は、豊かな髭をたくわえた人物で、身長は一メートル

六十センチ位でした。当時としては普通の身長ですが、非常に細身です。大礼服が残っていたため体型が推定できました。

徳川侯爵名古屋本邸

尾張徳川家は、明治二年（一八六九）に成瀬家と石河家から土地を返してもらいました。明治維新後、尾張徳川家はウェスティンナゴヤキャッスルの北東あたりにあった新御殿の地に奥山町邸を構えます。当主は東京に移り住んだので、奥山町邸は名古屋の管理事務所的な使い方をしていました。明治二十二年に、陸軍の練兵場とするため、現在の名城公園の地にあった下御深井御庭（したおふけおにわ）や奥山町邸を陸軍に接収され、代わりに小牧山が尾張徳川家に与えられました。この時、奥山町にあった幾つかの建物を大曽根に移したとされています。

明治二十二年以降に大曽根邸が整備されたようですが、蓬左文庫所蔵の図面をみると、玄関は小さく、使用人の部屋もあまりない、何となく別邸のような邸宅でした。義礼は、明治二十七年に大曽根邸を侯爵尾張徳川家の本邸としたため、大幅な改造工事が実施されます。侯爵本邸として相応しい体裁、つまり、来客のための応接間や、応接要員・管理要員の部屋も整備し、従来の御殿を大幅に拡充します。そして、明治三十三年（一九〇〇）に新しい大曽根邸が竣工しました。面積は約八万坪もある巨大邸宅でした。

しかし、義礼の歿後、十九代義親は東京へ移ったため、大曽根邸は尾張徳川家の別邸となりました。大曽根邸は、義礼が歿した明治四十一年から、昭和の初めにかけて順次縮小され、名古屋市へ寄贈される時は、最終的にこの徳川園及び徳川美術館の敷地部分約一万三千坪ほどになってしまいます。そして、残された土地も、昭和五年（一九三〇）に名古屋市に寄贈する際に三分割されます。南東部は、徳川美術館の敷地として財団法人尾張徳川黎明会に、北側から西側にかけては名古屋市に寄贈されます。大曽根邸は今の蓬左文庫があるあたりの約二三〇〇坪となりました。

なお、分割される前は、徳川美術館の本館がある場所には神社がありました。図面には、鳥居や本殿・拝殿・宝物殿らしい建物も描かれていますが、図面には文字が記されていないので、この神社が何であるのかこれまで分かりませんでした。それが、今回、尾張徳川家の年中行事を記した巻紙が地下倉庫から見つかり、六月一日は邸内東照宮の代参日と書いてあったのです。つまり、東照宮が邸内にあったことがわかりました。現時点では裏付けがないのではっきりしたことは言えませんが、美術館本館の場所にあった神社が、邸内東照宮だった可能性があります。

▲蓬左文庫エントランスホール

大曽根邸の古写真

大曽根邸の写真は明治末から大正にかけて撮られていますから、その当時の様子がわかります。大曽根邸の建物の外観や内部を撮った写真帖について、これがいつ撮られたのか議論になりましたが、細かく写真を見ると、畳がすりきれており、襖なども張り替えられた跡があるため、新築時の写真ではないという結論になりました。義礼夫

人だった良子は、義親が東京へ移る際、一緒に東京へ移ったのですが、本人は大曽根邸のことを非常に気に入っていたらしく、その思い出のために大曽根邸の写真帖を作ったのではないかと想像しております。

大曽根邸玄関古写真は、今の徳川園黒門脇の徳川園管理事務所になっている長屋の屋根から撮っています。写真に写っている井戸も、黒門脇にそのままの形で残っています。左側に写っている一号蔵・二号蔵は、南側に移築されて蓬左文庫の旧書庫になり、平成の再整備の時に西向きから北向きに九十度回転させ位置を移動して現在では蓬左文庫のエントランスホールとして利用されています。二棟だった蔵を一棟として繋げ、窓を塞いだため旧観と大きく異なるため、当初は大曽根邸ゆかりの建物とは考えられず、昭和五十七年の蓬左文庫改築の際に取り壊される予定でしたが、桐原千文蓬左文庫長と徳川黎明会の協力による調査によって移築・改造の経緯が判明し、歴史的建造物として保存活用されることになりました。

今回の調査で、御殿の図面も発見され、建築の詳細が判明しました。ただ残念ながら、御殿は空襲で焼けて現存していません。御殿の玄関前ロータリーは、丸い植え込みとして残っていましたが、徳川美術館新館建設時、徳川園整備時に更地にされてしまいました。この部分は、残してもよかったのではと私は思います。現在、大曽根邸の遺構である黒門と長屋・蔵・山の茶屋は、国の登録文化財になるように働きかけています。ただ門の建築年代が不確定なのが残念です。明治二十七年の建築仕様書に門のことが書かれているため、明治二十七年時に存在したことは確かなのですが、新築なのか、奥山町邸の門の移築なのかはっきりしません。奥山町邸の門であれば、もしかしたら江戸時代にさかのぼる可能性もあるため、もう少し調査をしてはっきりさせたいと思います。

▲黒門・長屋

義礼住居の写真を見ますと、屋根に避雷針があり、茅葺の瀟洒な感じの和風建築であったことがわかります。現在の徳川美術館第五展示室あたりにあった建物です。内部の写真にはランプが写っています。今回の調査でも、地下倉庫からランプの火屋が発見されました。おそらく予備としてとっておいたのでしょう。残念ながら、どの部屋のランプかは分かりません。

義礼住居の西側にあつた良子住居は瓦葺です。御新間は義礼住居の東側に張り出して建てられています。「御神間」とする記録もあり、何か特別な建物だったようです。庭園に張り出すような形で造られた建物で、戸袋には綺麗な絵が描かれています。

良子住居の西側には、御二階下という建物もありました。写真で見ると二階部分がないため、不思議な名前の建物と思っていましたが、どうも慶勝ゆかりの建物を移築したらしいことが分かりました。慶勝が住んでいた新御殿の二階建ての建物を移築したらしいのですが、移築の際、二階の部分は撤去して下の階だけを持ってきたため、「御二階下」と名付けられたようです。

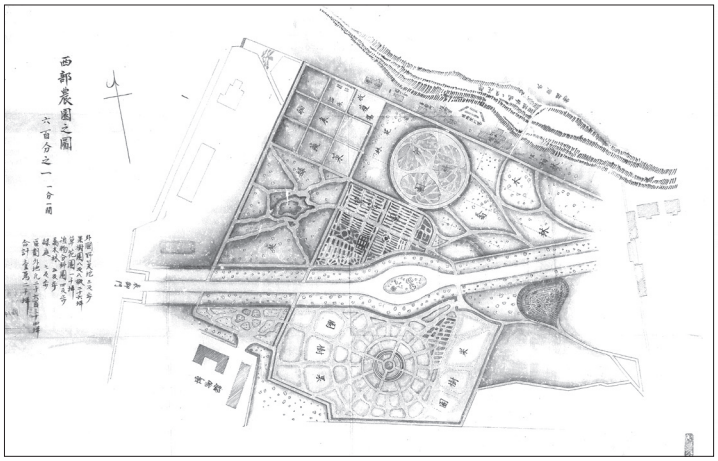
北側にあった書院は、巨大な建物です。和風建築にみえますが、今回発見された図面には、屋根の中はトラスト構造で、柱はボルト接続されていることが記されており、近代建築の要素をとりいれた建物であることが分かりました。内部は客間として利用されていました。外観は和風建築ですが、東側の内部は、暖炉を備え寄木床となる洋風の造りとなっていました。

書院の東側には、御三階という建物がありました。非常に瀟洒な建物で、当初は今の徳川美術館のエントランスホール辺りにありました。昭和五年に敷地が縮小される時には、取り壊さずにそのまま南に移動し、二三〇〇坪に

縮小された大曽根邸の敷地に再移築されました。この建物は、今の両国国技館のある場所にあった、尾張徳川家の東京本邸・横網町邸ゆかりの建物です。慶勝が建てた三階建築で、慶勝はこの屋上から写真撮影も行っています。慶勝ゆかりの建物ということで、明治十七年に横網町邸がなくなる時、東京から名古屋の大曽根邸に移築しました。ただし、大曽根邸に移築した時に屋根は改造して屋上部分はなくなっています。

大曽根邸の庭園

蓬左文庫に三枚の農園図があります。かつて大曽根邸内には、西は山口町、東は中央線まで広大な農園が造られていました。西部農園の図を見ると、総門から黒門に至る邸内の道が、現在の市道と同じで、現存するロータリーも当時のままであることが分かります。今の徳川公設市場があるところに明倫博物館がありました。尾張徳川家が、愛知県の教育博物館を引き継いで運営した博物館で、動植物標本などを展示していました。



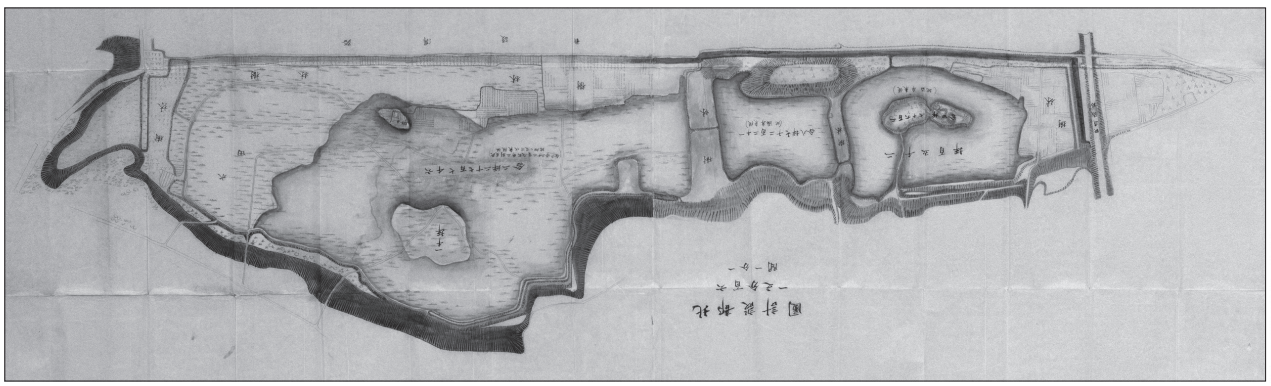
▲大曽根徳川邸西部農園図

また、農園では海外から輸入された植物も栽培され、日本で初めてユーカリやデイゴを紹介し、キャベツ・トマトを初めて栽培したのもここだと言われています。なお、ユーカリは蓬左文庫の庭で現在も元気に生育しています。

北部農園は湿地帯や畑になっていますが、図面ではかつて庭園だった池の痕跡が分かります。このように、現在の徳川園の周囲には、広大な農園が展開されていましたが、いつ整理されたのかはっきり分かりません。徳川公設市場は、大正の米騒動後の供給安定を目指し、明倫博物館を廃して設置された施設であるため、あるいは、農園もこの頃になくなったのかもしれません。

▲大曽根徳川邸東部農園図

義礼が亡くなった時の葬送行列の写真には、大曽根邸の西端にあった総門と東方向を撮った写真が含まれています。おそらくかつてあった相応寺の建


▲大曽根徳川邸北部農園図

物の上から撮った写真ではないかと思います。総門の内側は、鬱蒼とした樹林帯であることがわかります。

謎の建物

山の茶屋は徳川美術館の中にある非常に古い建物で、現在でもお茶会にも使用されています。明治二十七年の記録では「新築」となっていますが、古い図面が残っており、この図面では建物は一直線になっています。現在の建物はL字状に曲がっているため、現状と異なっているので、山の茶屋は移築の可能性が高いです。大曽根邸に移築する際、築山の邪魔になるのでL字形に改造したのでしょう。

▲山の茶屋外観近景西面

昭和十一年に開かれた三傑茶会に関する新聞記事を見ますと、名古屋城の「能見所」の建物を移築したと書かれています。この根拠ははっきりしませんが、当時の尾張徳川家の人は、名古屋城の建物と認識していたわけですから、少なくとも大曽根邸建造以前の建物である可能性は高いです。ただ、現存する名古屋城の図面では、似た建物をまだ確認できておりません。何か情報がありましたら、教えていただければと思います。

徳川園開園

十九代義親は徳川美術館を創設し、徳川園を発展させるきっかけを作った人です。大正時代になると、華族家も代が替わり、それまで大切に残されてきた歴代の什宝を散逸させてしまう家が出るようになりました。義親自身は理解ある人物でしたが、自分の子孫にそういった不心得者が出る可能性もあるため、昭和五年に財団法人尾張徳川黎明会を設立し、尾張徳川家歴代の什宝を寄付しました。尾張徳川家の什宝は、公の財産になったわけです。そして、徳川美術館をつくって一般に公開するという形をとりました。

先日、伊藤悟徳川園前所長の尽力で発見された大曽根邸寄贈式の写真が中日新聞に載りました。この写真は、ここに写っている方のご子孫がお持ちでして、今回初めて紹介いたします。大曽根邸譲渡式は、昭和五年十月十日に執り行われました。正式に名古屋市に譲渡されたのは、名古屋市議会の承認が得られた後の昭和六年三月十日で、名古屋市では一般公開用に整備を進め、昭和七年十一月三日に徳川園を開園させます。

昭和八年十二月二十五日に発行された徳川園のパンフレットを見ると、現在でも残る段丘上の庭園部分は、大曽根邸庭園の名残を留めていることが分かります。徳川園入口にある蘇山荘は、昭和二年開催の汎太平洋博覧会の迎賓館を昭和十二年に移築した建物で、大曽根邸とは関係ありませんが、貴重な歴史的建造物です。

なお、徳川園の整備にあたり、東京都新宿区の早稲田大学文学部で校舎の建て替え時に発見された尾張徳川家下屋敷「戸山荘」の龍門の瀧の石組みを移設したことは、最大の成果だと私は思っています。本来、廃棄されるはずだった歴史遺産を見事に再生しており、文化財保護の観点からも、徳川園の歴史性を深める上でも英断だったのではないでしょうか。

この瀧は、十一代将軍家斉も天下の名園と讃えた庭園遺構の一つです。上流での水量調節により、瀧から落下する水を調整することができ、下流の飛び石を渡った後に、水量を増して飛び石を水没させるといった趣向が凝らされていました。徳川園では、この仕掛けを再現しています。

徳川園は新しい庭園ではありますが、樹林帯はかつての大曽根邸庭園の名残を留め、尾張徳川家ゆかりの庭園遺構も移設されており、歴史の風合いが備わった庭園です。今回の企画を機に、これまでほとんど知られることのなかった大曽根邸・徳川園の歴史に興味をもっていただければと思います。

表紙：亀鈕銅印「明倫堂図書」（きちゅうどういんめいりんどうとしょ）

亀鈕銅印 印文「明倫堂図書」

五．七×二．四×三．三cm

尾張藩の藩校「明倫堂」の所蔵した書物に捺された蔵書印である。印文に「明倫堂図書」とあり、四つ足で立った亀の鈕（つまみ）がついた銅製の印である。昨年知立市内の歯科医師野村尚次氏より蓬左文庫に御寄贈いただいた。古美術の収集家であった同氏の父上の収集品という。専用の木製の箱には、印面と「名古屋市某医師ヨリ出デタル物ニテ同先代ノ珍蔵ナリト云　昭和弐年七月十日毛受骨董店ヨリ求之」と、収集の経緯を記した書き付け（左図参照）が印とともに納められていた。

明倫堂は、尾張徳川家九代宗睦によって天明三年（一七八三）藩士教育と民衆教化を目的に、創設された尾張藩の藩校である。明倫堂における書物収集は、当然ながら開校当初から計画されていた。書物の収集、管理にあたる「典籍」が置かれ、数年後には、「明倫堂御文庫」が建設された。明倫堂の蔵書は、開校当初、献納、購入などにより約二万冊が収集され、幕末期には、二万三千数百冊余を所蔵した。

明倫堂の旧蔵書は、現在、当文庫や国会図書館にも所蔵されているが、九千点余と最も多くを所蔵するのは、愛知教育大学付属図書館である。明治維新後、明倫堂の蔵書の多くは、愛知県第一師範学校に受け継がれ、新制大学となった同校の所蔵となって、現在にいたる。

明倫堂の旧蔵書に捺された印記は、この「明倫堂図書」と「明倫堂書庫記」である。明倫堂御文庫の蔵書と尾張藩主の手元蔵書を管理した奥御文庫の蔵書は関係が深く、貸借関係もあったためか、明倫堂旧蔵書には、「尾府内庫」など奥御文庫の蔵書印記を持つものも数多く含まれている。

参考：高木靖文「明倫堂文庫の形成」（『徳川林政史研究所紀要』昭和五二年度）

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター（メルサ3F）4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

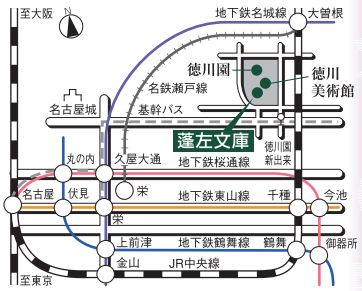
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「野並」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日のときは直後の平日）

12月14日（金）～ 1月3日（木）特別整理、年末年始休館　但し12月14日（金）15日（土）16日（日）はエントランス・閲覧室開室します。

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第85号　☆平成24年10月1日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

徳川園80周年